

グループホーム在住の重度知的障がい者における質的研究

ー余暇生活の障壁と適応における事例研究ー

○ 木本 多美子 [都留文科大学非常勤講師] 小森 伸一 [東京学芸大学]

キーワード：重度知的障がい者 グループホーム 余暇

1. 問題の所在

心身に障がいがある人も、人間としての権利に基づいて、住居・教育・労働・余暇などの生活の条件を可能な限り障がいのない人の生活条件と同じようにすることというノーマライゼーションの概念が普及してきている。

障がいのある人の住居に関しては、従来の大型施設の在り方が見直され、住み慣れた地域の中で、社会との接点を持った生活ができる等の利点が見られるグループホームの普及が我が国においても見られている。

しかし、知的障がいのある人々の余暇活動に関しては、学齢期を過ぎると消極的な余暇生活が送られ、人との関わりが少なくなることや、家に引きこもりがちになる傾向にあることが、これまでの調査において指摘されている。さらに、知的障がい者の住居別にみた余暇活動の調査では、自宅在住者に比べ、施設・グループホーム在住の利用者の方が、「テレビ」「ラジオ」などの受身的な余暇活動に留まっている傾向にある。

そこで、本研究は、グループホームに居住しながら、余暇生活を生き生きと過ごしている重度知的障がい者を対象として、その余暇歴及び余暇障壁を具体的に明らかにし、何が変わることによって、その障壁要素を克服し、余暇生活の充実に繋がっていったのかについて知見を得ることを目的としている。その目的を遂行するにあたり、次の2点を研究論点として分析、考察を行った。

I. 研究対象者における余暇生活の障壁とは何であるか。

II. 研究対象者の余暇生活はどのように適応され、余暇生活の充実に繋がっているか。

2. 研究アプローチ

1) 研究方法論及び研究方法

上記の論点を導くために、本研究は解釈主義的パラダイムに依拠する質的研究の一つである事例研究（ケーススタディ）を採択している。本研究の場合、基礎生活支援事業のグループホームと並行して余暇支援事業も行っている法人Aの取組みの中で、そのグループホームに居住し、生き生きと余暇生活を実践している重度知的障がい者という稀少な事例を扱った単一ケーススタディとなる。データは、研究者本人が非常勤スタッフとして基礎生活支援と余暇活動の両方の関わりの中で実施された1年間のフィールドワークにおける参与観察に基づくフィールドノート、インタビュー、関係文書資料を収集データとした。さらに、事象や語りの時間的な連続性や文脈の中から主要概念や重要な相互関係を明らかにしていくシーケンス分析によって、上記2つ研究論点の観点に基づいて検討した。

2) 研究対象者とその選定

本研究では、意図的対象選択によって、グループホーム在住であり、重度知的障がいのある31歳ハナコ（仮名）を研究対象者として選定した。ハナコは、法人Aが主催している週2回のボウリング教室、月に1回の料理教室、室内運動等に積極的に参加している。さ

らに職場（作業所）や慣れない場において自発的な言動の少ないハナコではあるが、障がい者ボウリング大会で金メダルを取った際には、そのメダルを職場の職員に見せに行く等の自主的行動が見られた。しかし、保護者のインタビューを元に、ハナコのこれまでの余暇歴を確認すると、幼少期から10代にかけ、「やれることがなかった」「活動する場がなかった」「家ではテレビを見て過ごしていた」など余暇生活が充実していなかったという現在とのギャップが窺えた。このような経緯で調査の対象をハナコに絞るに至った。

3. 考察および結論

1) 研究論点Ⅰ「研究対象者における余暇生活の障壁とは何であるか」の観点から

余暇障壁の要因として「対人的な要因」及び「本人要因」の2点が明らかになった。「対人的な要因」については、本人の余暇参加に大きな影響を及ぼす「保護者(主として兄妹を含めた家族)」、余暇活動をサービスとして提供する「支援者(サービス提供者・指導者)」、余暇活動を一緒に行う「余暇パートナー」が、その起因要素としてあることが分かった。この点から重度知的障がい者が、余暇生活の充実を実現するために、知的障がい者の能力のみの変化に効果を委ねるのではなく、余暇の状況の適合も合わせてみる必要性が示された。また、本人に起因する障壁(本人要因)については、継続的な活動の中で改善が見られた。すなわち、一過性に留まらない継続的な余暇活動の場が重要である。本人に起因する障壁は、改善する可能性があるものと考え、余暇活動の場を知的障がい者の抱える問題を改善に向かう学習の場と成り得ることが示唆された。

2) 研究論点Ⅱ「研究対象者の余暇生活はどのように適応され、余暇生活の充実に繋がっているか」の観点から

ハナコにおける余暇適応の様相より以下3つの視点から考察を行ない、そこから導かれた知見は次の通りである。

- a. ハナコの余暇適応の過程において「適切な支援者(サービス提供者・指導者)の存在」と「余暇パートナーの存在」が重要であった。「適切な支援者」としての態度と関わりは、「受け入れる態度」「諦めない気持ち」「段階を踏んだ適切な指導」「周囲を巻き込む力」「継続的な関わり」であった。また、「余暇パートナー」の役割は、「仲間としての関わり」であった。余暇適応の過程において、参加者のニーズを理解しそれを具現化できる「適切な支援者・指導者」と、活動を共有する仲間という立場で助け合える「余暇パートナー」の存在が重要であることが示唆された。
- b. 研究対象者の余暇適応過程において、保護者の余暇に対する肯定的な価値認識の変化と、本人の継続的な経験から得られる余暇活動における能力の向上が見られた。その点を考慮すると、余暇教育は、知的障がい者本人のみではなく、本人を支援する家族に対しても重要であることが明らかになった。
- c. 本研究に見られたような、地域に根差した少人数制のグループホームにおいて、「基礎生活支援」と「余暇生活支援」の双方のサポートを連携することで、充実した余暇生活の展開に大きく寄与できるということが示唆された。具体的には、主に基礎生活場面であるグループホームにおいて、日頃から余暇活動を奨励し、利用者同士のコミュニケーションを促進する等の取組みを行っていくことの重要性が見出された。